

令和4年度小平市立小平第六小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

1 調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

3 各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

思考力、判断力、表現力の項目に関しては「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各項目において東京都平均に比べ高かった。特に「話すこと・聞くこと」の項目に関しては、東京都の平均に比べて約8ポイント高い結果となった。

課題

知識及び技能の項目に関しては、東京都の平均より低い結果となった。話し言葉と書き言葉の違いに関する理解や漢字の問題の正答率が低かった。言葉の特徴や使い方に関する理解を深め、漢字を文の中で正しく使う力を一層育む指導が必要である。

学校で取り組む具体的な改善策

新出漢字を繰り返し書いて定着させる指導よりも、熟語を調べたり、漢字の意味を理解したりする指導を引き続き重視していく。ICT機器を活用しながら、該当する漢字を含んだ熟語探しを行うなど、児童の興味関心を高めながら指導を行うよう工夫する。調べた熟語を使って短い文章を作る活動を取り入れ、学んだことをすぐに活用し、漢字を効果的に活用するメリットを実感させていく。

【算数】

状況の分析

学習指導要領の「変化と関係」の領域に関して、東京都の平均より4.1ポイント低かった。
知識技能の項目に関しては、都平均を下回っていたが、思考・判断・表現力に関する項目では、都平均に比べて2.3ポイント高かった。

課題

知識技能の項目に関しては、都平均より3.6ポイント低い結果だった。
特に乗法計算、割合の計算に関しては、都平均を下回っていた。計算力の向上と割合に関する理解を一層育む指導が必要である。

学校で取り組む具体的な改善策

学習活動では個に応じた指導を充実させるため、児童一人一人に応じた手だてを講じながら習熟度別指導をさらに推進していく。児童の生活に身近な場면을問題として設定し、問題解決型の学習展開に沿った数学的活動を行い、学習理解を形成していく。

朝学習では、東京ベーシックドリル等の基礎・基本のワークに取り組み、知識・技能の確実な定着を図る指導を行う。

【理科】**状況の分析****課題**

思考力、判断力、表現力の項目では、東京都平均に比べ3.3ポイント高かった。

学習指導要領の領域別に見ると、「エネルギー」と「生命」を柱とした領域に関してはそれぞれ都平均を上回る結果となった。

知識・技能の項目に関しては、都平均より4.9ポイント低かった。

実験道具の名称や、各学習内容で出てくる用語への理解を深め、知識・技能に関する理解を一層育む指導が必要である。

学校で取り組む具体的な改善策

視覚的に見て学ぶだけでなく、具体物を実際に操作する活動を通して、知識・技能を高める指導を行っていく。道具の名称を確認する際にも、実際に具体物を扱って実験を行っていくなかで確認する。

理科で学ぶ事柄と普段の生活を結び付けて考える場面を多く設定し、問題解決への意欲を高める指導を行う。実験の前には、根拠をもって予想する場面を設け、実験後には観察したことから考察する場面を設けて授業を行う。

【質問紙】**状況の分析****課題**

生活リズムに関する項目や自己肯定感に関する項目については、全国平均より肯定的な回答が高い。

学校でのICT機器の使用に関する項目については、全国や東京都の使用機会よりも下回っている。

ICT機器の使用について、5年生までは1日1回使用している児童が約5%であった。

発達段階をふまえ、学校での使用機会の目標を低学年で1日1回以上、高学年で1日2回以上とする。

学校で取り組む具体的な改善策

教員のICT活用指導力を上げていく。ICT機器を使ったドリル学習、インターネットを利用した調べ学習の他にも音楽や国語の音読の場面で録音機能を使ったり、自然観察の場面で写真機能を使ったりして、学習中の使用頻度を上げていく。また学習課題を早く終えられた児童には、端末を使用し、プログラミングソフトやタイピングソフトを使ってICT活用力の向上を図る。

学習者用端末の使用ルールを確認、徹底し、家庭へも持ち帰る。家庭学習としてもドリル学習や調べ学習を行う。また、音楽の合奏でのパート練習や体育の表現の動きを動画で録画し、家庭でも繰り返し視聴、練習できるようにする。

学校での使用機会を増やすことと家庭への持ち帰りによって、ICT機器が児童にとってより身近な学習用具となるようにする。